

## 2018年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、評価情報分析室副室長、教職教育研究センター教員、中学部部长、千里国際中等部・高等部校長、からの第三者評価／学校関係者評価をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成28年改訂）で示された学校運営における12分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」「教育環境整備」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「人権教育」、2015年度より共学になったことに伴い、これまでとは異なる女子生徒への指導が始まったことを踏まえて「生徒指導」を設定して実施しました。また、2014年度より文部科学省から採択を受けたスーパーグローバルハイスクール（SGH）に関連して「国際理解教育」を継続しました。

2018年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒98.2%（前年度回収率99.3%）保護者77.3%（前年度回収率75.7%）教員100%（前年度回収率100%）でした。

今年度も各項目を生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2019年3月15日  
関西学院高等部  
部長 枝川 豊

## 学校評価

### 教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う。」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、又その学びの目的を他者に対して仕えるためであるという関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

2014 年度より文部科学省に採択されたスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業を軸に国際感覚を身につけた人を育成をする。

### 2018 年度の評価項目

- キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- 教育課程・学習指導：重要項目であり、生徒の「学び」が確かなものになっているか、そのためのカリキュラム編成になっているか、検証のために評価項目として設定している。
- 生徒指導：規律ある生徒の生活環境、および安心して学べる生活環境が整えられているかを検証するために評価項目として設定している。
- 教育環境整備：共学化になり引き続き生徒数増加、女子生徒の入学に対応するための設備を整備することは重要であり、快適な学習環境を保証するために評価項目として設定している。
- 人権教育：重要項目であり、グローバル社会において人権を尊重し、多様性が受容される環境が整っているかの検証のために評価項目として設定している。
- 国際理解教育：SGH事業が5年目を迎え、生徒の国際理解への姿勢を図るため、この項目をして設定している。

### 2018 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有・実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現。		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒のキリスト教に関する理解の向上を目的とした活動を今年度も引き続き行った。その結果、生徒質問1「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う」で肯定的な回答を69.8%（昨年度67.2%）、生徒質問2「礼拝の時間は大切だと思う」で72.2%（昨年度73.4%）、生徒質問3「聖書の言葉は共感できる部分がある」で69.6%（昨年度71.4%）を得た。昨年度と大きな差は出ていないため現状維持と理解する。このアンケート調査を開始してから、大きな数字の変化はない。それは、高等部のキリスト教主義教育のフォームが確立しているからだろう。また、女子生徒のキリスト教主義教育に関する評価が高い。バイブルキャンプの参加者も宗教部員も圧倒的に女子生徒が多い。</li> <li>● 自由出席である早朝祈祷会（火曜日8:10）の出席状況の向上を毎年目標としているが、平均出席156.6名（昨年度120名）と増加し目標は達成できた。</li> <li>● 学校外のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）との連携・関心を高めるため、熊本地震の被災地である益城町への訪問、保育園・学童保育での奉仕、コンタクトレンズケースのリサイクルなどの活動を行った。その結果、生徒質問4「高等部は、キリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持って</li> </ul>		

	<p>いる」で肯定的な回答が 65.5%（昨年 58.9%）と大きく増加した。ボランティア委員会には、現在 19 名の委員がいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 保護者が回答した肯定的な回答の割合は 80.7%（昨年 80.7%）と多くの生徒が昨年同様強い関心を示した。保護者の方へのキリスト教理解の取組の一環として、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」を行っている。その出席者数は増加傾向にあり、保護者のクリスマス礼拝・祝会は申し込み人数が多かったため、今年度は抽選となった。</li> <li>● 保護者の方へのキリスト教理解の取組の一環として、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」を行っている。その出席者数は増加傾向にあり、保護者のクリスマス礼拝・祝会は申し込み人数が多かったため、今年度は抽選となった。</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 現状維持という評価を受けて、現在、確立されているフォームをベースにしつつ、さらにチャペルのあり方、キリスト教行事の工夫などの検討を行う。そのためには、チャペルでの静けさの確保をする。</li> <li>● 今以上に、近隣教会の牧師、関西学院内のクリスチャン教職員に奨励を依頼し、魂の育成に励む。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【接続する大学が求める学力を保證する学習指導の実践】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 接続する大学で学ぶ力を保證し、社会の要求に応えうる総合的知識を習得する。具体的には 1. 基礎学力の向上、2. 興味や関心に応じ深く学ぶ、3. 知の統合を目標として掲げる。</li> <li>● その中で学習に躓きのある生徒への補習などきめ細やかな対応をする。</li> <li>● 教育課程や接続する大学への進路ガイダンスを適切に行う。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 近年、英語・数学・国語の週課題や宿題等の質・量を充実させた取組みを行っている。それが功を奏し、生徒質問 7、8、9、10、保護者質問 3、4、5 などの、主に「生徒の学力がついているか」という質問において 68～80%の肯定的な回答を生徒と保護者から得ることができた。</li> <li>● 特に、生徒質問 8「授業内容を理解することができている」の肯定的な回答は 79.9%で、昨年度の 80.6%とほぼ同じである。このことより、基礎学力の定着に結び付いているという実感につながっていると思われる。学力向上のための取組について概ね、順調であると考えられる。</li> <li>● 英語や数学が苦手な生徒対象に開講している特別授業や、英語、数学、国語に関して宿題が未提出の生徒、あるいは小テストにおいて基準点を満たさなかった生徒に対して放課後に行う居残課題という取組を数年続けている。その結果、生徒質問 12「補習や課題は適切に行われている」の肯定的な回答が 80.6%で昨年度の 75.9%と同様比較的高い評価を維持することができた。</li> <li>● 各学年に対し進路説明会を適切な時期に行った。その結果、教育課程の説明（進級・推薦・卒業）に関しては、生徒質問 5、保護者質問 2、教員質問 10 において、80～90%の肯定的な回答を得ることができた。</li> <li>● 接続する関西学院大学に関する情報の提供に関する質問においても、生徒質問 13 で 81.8%、保護者質問 6 で 75.2%から肯定的回答を得た。今後、昨年度入試より関西学院大学の各学部へ推薦する最大数が変わり、大学が求める英語力も外部英語試験を基準としたものに変更された。外部英語試験の受験機会も含め、これからも生徒や保護者が望む情報提供を十分にすることが必要である。</li> </ul>		

今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学力向上をめざす取組を教科委員会を中心に、学校全体で進めて行く。</li> <li>● I C Tを用いた授業展開について研究を進める。</li> <li>● 基礎学力の定着をより一層進めるため、英語・数学の特別授業・宿題指導の継続・強化を行う。</li> <li>● 教育課程の説明（進級・推薦・卒業）については現在の取組を継続し発展に努める。現1、2年生の大学進学に関する十分な情報提供のあり方について、提供する情報の内容と時期について教務部で検討を行う。</li> </ul>
-------	--

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主性を育み、気持ちよく学校生活を送るための生活指導徹底】	自己評価	B
目標	他者を気遣い、学校生活のルールを守り、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 本年度新入生より全生徒がタブレットを携行した。その活用の際し、生徒活動としてI C T委員会を発足し、情報を共有しながらその使い方を見守ってきたが、取得可能なアプリの制限や規制などは継続して観察していく必要性が十分ある。スマートフォンとの併用に際して次年度以降課題は残るものの、校内でのルールを守る姿勢は前年度と比較しても向上している。</li> <li>● 学友会、管理委員会と協力しながら毎月第4週水曜日、また1月にはキャンペーンとして3日間連続で服装チェックを行った。その甲斐もあり、前年度より違反者の減少が見られた。生徒たちと一緒に注意していくことにより、生徒同士で制服をしっかりと着用しようとする意識が高められている。自転車通学者に対しての指導も例年以上に行ってきたことから、校内でのマナー向上が見られたのは良かった。また不正乗り入れも激減している。</li> <li>● 礼拝への集合状況は2学期終盤は全学年遅くなっていた。また、教室の施錠等、それぞれの生徒がすべきことへの責任感について気になるところである。毎回礼拝堂入口において指導を試みるも新たな対策は必要である。</li> <li>● 保護者質問8「高等部は、校内・校外問わず挨拶・時間厳守・美化など社会的基本ルールを適切に指導している。」の結果に対して、肯定的な回答が78.8%と、昨年度の75.2%と比較すると肯定的な回答が上がっているが、生徒質問16「守るべき高等部生活のルールやマナーが明確である」の結果では肯定的な回答が62.5%と、昨年度の60.4%と比べて、数値が上がっていないことは最も大きな課題であるといえる。また教員質問22「高等部は守るべきルールやマナー（交通マナーなど社会的マナーも含む）を明示し、日々の指導をきめ細かく行っている。」の肯定的な回答が69.8%と、昨年度の63.3%と比較して、あまり数値が変わっていないことから、徹底した生徒指導、呼びかけはさらに必要である。</li> </ul>		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● スマホを含めI C T関連に際しては、他校や社会情勢を見ながら高等部独自の文化を作り上げていく。</li> <li>● ルールを順守することが大切なのではなく、当たり前を確実にしていくなかで、ルールの大切さを理解させる。</li> <li>● 学校、保護者との連携は当然のことながら、生徒が教員に対して話をしやすい環境づくりを行う。また、校内で生徒たちの挨拶の励行は年々向上し、教師からも積極的に声をかける。</li> <li>● 例年、いじめを許さない姿勢を強く示しているが、カウンセリング委員会とも情報共有しながら、アンケート結果に基づいての指導のみならず、普段の学校生活から見られる変化にも気遣いながら、誰もが安心した学校生活を送</li> </ul>		

	れるよう取組んでいく。
--	-------------

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【共学化に伴う学校設備の準備・改善】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 男女共学、定員増に対応した施設・設備の充実を図る。</li> <li>● ICT、アクティブラーニングなどを活用した、新しい時代の教育に対応できる教育環境を整備する。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 今年度も引き続き、生徒・教員の意見を聞きながら校舎の整備と維持・管理を行った。高等部グラウンドの人工芝化工事を現在進めているところである。</li> <li>● 昨年度から取組んでいるICT環境整備については、今年度、特別教室等への電子黒板機能付きプロジェクター等の整備が終了し、ハード面の基本的な整備は終了した。また、今年度の1年生から、学校制定のタブレット端末を全員に購入してもらっている。機器・ネットワークの運用や、生徒・保護者への各種サポートについては、常駐のICT支援員の助けもあり概ね順調に推移している。</li> <li>● 特に1年生の担任・教科担当者は、タブレット端末の配備をきっかけとして、より効果的な教育活動のために試行錯誤を重ねている。授業での利用はもちろん、SGHやHR活動等でもタブレットならではの取組が行われている。また、生徒・保護者への基本的な伝達もアプリ経由で行われるようになった。</li> <li>● 結果として、今年度も高等部の教育環境整備全般について、生徒(質問 19～21)、保護者(質問 12～13)、教員(質問 28～32)ともに80%を超える高い肯定的評価を示している。概ね高等部の教育環境の整備が順調に進められていると判断して良いと考える。</li> <li>● 順調に推移していることは、生徒質問 21「高等部の、パソコン、プロジェクターなどのICT機器は、適切に提供・設備されている」と・教員質問「高等部のICT教育環境は、適切な水準である」のICT環境への肯定的評価が90%を超えていることから確認できる。</li> <li>● 公開授業や教員同士の取組の共有も始まり、また、核となるワーキンググループの教員は、外部の研修会等に講師として招かれる機会も増えた。その結果、教員の間にも更なるICT環境の整備や活用のための研修等への要望が出ているのも確かである。これは、ICT環境整備が始まった昨年度は、一昨年度と比較して、教員のICT環境整備・運用能力についてのアンケート結果が飛躍的に上昇したのに対して、ICT「整備」から「活用」にシフトした今年度は、若干下降している(質問 32 : 98.1%→92.4%、質問 33 : 88.5%→85.0%) ことからわかる。</li> </ul>		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 施設整備については、これまでと変わらず、現在の充実した施設・設備の良好な維持・管理を行うと共に、共学化完成を受け、新たな視点で整備の必要性のチェックを行う。</li> <li>● ICT環境については、まずは今後タブレットを持つ生徒数が増加していく状況での安定的な運用をめざす。</li> <li>● ICT環境整備を起点に、教員に対して様々な研修等を実施し、アクティブラーニング型授業・PBL型授業を実践する教員を後押しする体制を整え、高等部らしいアクティブラーナーを育成していくための環境を整える。</li> </ul>		

評価項目 【テーマ】	人権教育 【人権意識の涵養と日常における実践】	自己評価	A
目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 情報化やグローバル化の進展に伴って多様化・複雑化する様々な人権課題に関心を持ち、自らの問題として仲間と共に考える。また日常の中で、自他の人権を尊重する生き方の実現にむけて、具体的に行動する。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 昨年から従来の人権講座を改め、テーマを絞り込み、グループワークを通して掘り下げる「人権ウィーク」を展開している。2018年度もこの形式を踏襲した。今年度は昨年と同じテーマ「身近な人権～SNSといじめ～」(1年生)、「多様性を考える～障がい者問題を中心に～」(2年生)、「こどもの人権」(3年生)に加え、3年次に「ジェンダーとLGBTQ」に関する取組を加えた。共学化に伴い必要なテーマであると人権教育の委員会で判断したこと、生徒アンケートで「次に人権学習で取り上げて欲しいこと」の項目に、このテーマをあげる生徒が多かった点が背景にある。このテーマを学んだ後のアンケートで、「自分も多様な性の在り方の一つだと知った」等、強い印象を受けたという生徒の感想が多く寄せられた。 昨年と同じテーマの実施にあたっては、生徒・教師の「振り返りアンケート」から昨年浮かび上がった様々な改善点をできるだけ生かした。学校外からお招きした講師のお話を伺った後、質問事項をグループで分かち合い、もう一度同じ講師をお招きして質問に対するコメントを頂くという取組もその一つである。その結果、講師を通じて障がい者福祉施設に関心を深めた複数の生徒が、部活引退後、施設における介助の働きに長期間参加してくれたことは、喜ばしいことであった。</li> <li>● 今回の学校評価アンケートで生徒質問 24「人権講座を中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている」の結果に肯定的評価をしている生徒は、前年比 10.5%増の 79.8%、教員質問 37「人権講座を中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている。」の肯定的な評価も昨年同様 90%を越え、前年比やや微増となった。しかし、人権学習の成果が生徒の人権感覚向上や人権を尊重する日常の言動と結びつくにはまだ時間がかかると感じる。保護者質問 15「生徒自身が種々の人権問題について、より関心を持つようになったと家庭で感じる」という質問に対し、肯定的回答が 54.0%であるものの、昨年度の 52.3%とほとんど変わらなかった点も、それを裏付けているかもしれないと考える。人権学習が、生徒の日常感覚と乖離しないよう、さらなる工夫が必要である。</li> <li>● 9月に生徒・保護者を対象とする「いじめアンケート」を実施した。このアンケートで浮かび上がった事例に対し、教員間で情報を共有し、ケースによってはチームを編成して丁寧な対応を心がけた。生徒質問 17「高等部は、不正やいじめを許さないよう指導している。」や保護者質問 10「高等部は、不正やいじめに毅然と対応している」という項目に対し、肯定的に答えている生徒・保護者が共に 80～90%と高い水準であった。しかし、まだ学校の対応が十分でないと感じる生徒・保護者もいることから、今後も慎重かつ迅速ないじめ対応が必要である。</li> </ul>		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 関西学院内での人権教育に関する情報交換や、学校外とのネットワークを通じ、人権課題の教材化についての情報を収集し、さらに充実した人権教育の実現を図る。</li> <li>● 講義中心の人権講座に比べて取り扱う人権課題が少なくなっているため、グループワークという従来の手法は残しつつ、テーマを精選・再編し、広く社会に存在する人権課題についても学ぶ機会を持つ。</li> </ul>		

	<ul style="list-style-type: none"> <li>● いじめ対応については、アンケート実施の時期を待たず、人権・カウンセリング・生徒部が連携し、担任団やクラブ顧問と情報共有しながら、丁寧でスピード感のある対応を行う。</li> <li>● 人権の委員会に所属する教員のみならず、広く教師集団が人権に関する共通理解を持つべく、学内の教員対象人権研修会を更に充実し、学外での研修会参加も奨励する。</li> </ul>
--	---

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な問題への取組意欲・関心の向上】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● S G HのプログラムとしてのG G P（全生徒対象）を通して、世界共通の価値観や世界規模の課題に対応する姿勢を育み、また同時に異文化理解を深める。</li> <li>● 国内外で開催される国際交流プログラムへの積極的な参加を促す。</li> <li>● 短期・中期・長期留学希望、海外渡航の意欲を育成する。 受け入れ留学生の数を増加させ、学校内での国際交流の場を提供する。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2014 年度に文部科学省からスーパーグローバル・ハイスクール（S G H）の指定を受け、G G P（General Global Program 全生徒対象）、G L P（Global Leader Program 選抜された生徒）と二層の教育プログラムを実施しており、今年度はその最終年度を迎え、この5年間取組んできた数々のプログラムの集大成を見せる年でもあった。そのためG L Pについては、高1対象のG S I（Global Study I）と高2年対象のG S II（Global Study II）は、それぞれ継続して世界を知り、グローバルな課題を解決・実践する力を身につけることを目標とし、週1回の放課後に1時間授業を行ったが、G S Iについては全生徒へのタブレット必携化の影響もあり、大学教員による講義を通して専門的な知識を吸収するのみならず、授業で書く・話す・発表する活動が多く取り入れられ、積極的に協働学習が行われた。またI C T機器の利用により、高等部の教員も自然に生徒達に実践的な場で英語を使用する機会をさらに多く与えることができた。</li> <li>● 昨年度と同様、G S IとG S IIが依然座学中心になる傾向は継続されたものの、学校外での現場体験不足を、学外で開催される様々な国際交流・協力のプログラム、S G H関係で全国各地で開催されるフィールドワーク、ワークショップに参加させ、G L Pで蓄積された知識・能力をアウトプットし、自分の力を試す機会が与えられたことで、ある程度解消された。</li> <li>● また高校3年生の選択科目として開講されて3年目になるG S III（Global Study III）の授業においては、今年度インドネシア・バリ島の高校と通信型課題解決学習をスカイプを活用して実施し、専門的な知識や経験を通じて、主体的に学び課題解決のために行動できる能力と、多様な価値観を超えて協働する姿勢を養うことを試みた。</li> <li>● 過去5年間開催してきたG G Pとしての講演会も、最終年度は今まさに現場で国際貢献を行っている人物として、カンボジアなどで貧しい子どもたちの手術や治療などを無償で続けている小児科医吉岡秀人氏をお招きし、生徒達の国際問題への認識と解決への意識付けを行った。また2年生は、グローバルなテーマをもとにグループでイノベーションプログラムに取組み、1年生は、ニュースアプリを活用して国際問題の情報収集を行い、プレゼンテーションを行った。</li> <li>● 生徒質問 25「国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる」については、昨年度は全体の肯定的評価は 69.2%であったが、</li> </ul>		

今年度は 70.0%と少なからず増加がみられた。また同質問を男女別に比較した場合、全男子生徒では肯定的評価が、昨年度 65.0%だったのが今年度は 67.5%と上昇したが、全女子生徒では昨年度は 74.8%であったが、今年度は 73.7%となり、昨年度は大きな上昇がみられた女子生徒の意識に大きな変化は見られなかった。

- 教員質問 38「高等部は、生徒の国際的な諸問題（国際理解協力、環境問題、紛争など）への関心を高める努力をしている」については、肯定的評価は昨年度の 90.2%から 94.2%と大幅な上昇がみられ、これはSGH最終年度の5年目を迎え、生徒達にGGPや諸科目における国際理解教育が行われたことによって、教師全体にも国際プログラムが浸透してきたと考える。
- 保護者質問 16「高等部は、生徒の国際的な問題への関心を持つようになったと家庭で感じる」について肯定的評価が昨年度の 77.4%から 72.0%と昨年度に続き低下しており、学校の国際交流に対する取組みについての情報共有ができていなかったことが原因であると考えられる。また同質問に対し肯定的評価は、男子保護者 72.3%と女子保護者 72.0%で、昨年度の男子保護者 71.6%、女子保護者の 75.7%に対して差がみられなかったのが特徴である。
- 生徒質問 26「語学力や国際性を身につけることができるプログラムなどが高等部で提供されている」については、全体の肯定的評価は昨年度の 75.8%から 76.3%に増加した。男女別では、全男子生徒の肯定評価は昨年度 74.7%から 75.0%に、そして、全女子生徒では、昨年度 75.9%から 77.8%と共に増加が見られた。従来からの各種国際交流プログラムや留学について意識を男女関係なく学校として高めているといえる。
- 教員質問 39「高等部は、語学力を含め、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している」においては肯定的評価が昨年度の 100%から 98.1%と減少が見られた。
- 保護者質問 17「高等部は、語学力向上を図るとともに、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している」について、昨年度の 71.9%から 71.2%とその肯定的評価の割合に変化は見られなかった。男女別では男子保護者は昨年度の 70.2%から 72.0%に増加し、女子保護者は 74.3%から 70.2%と大きな減少が見られた。
- 質問 16 と同じく、男女の保護者の間に捉え方の差がみられた。また昨年度と同様、教員と保護者の間の受け止め方に差があり、教員の自己満足にとどまるのではなく、保護者と生徒達へ提供するプログラムの情報共有の仕方を考える必要がある。
- 生徒質問 27「将来、機会があれば留学や渡航をしたいと感じている」についての全体の肯定的評価は、昨年度の 71.9%から 74.1%に大きく増加し、男女別では、全男子生徒では昨年度の 67.2%から 69.2%に、全女子生徒では昨年度 79.8%から 82.1%に共に順調に増加しているが、男女別に海外への意識の差が大きく見られた。男女の割合の差についての調査の必要性が感じられる。SGHも終了を迎える中、今後、従来の各種国際交流プログラムだけでなく、生徒達の幅広い興味と関心を満たす活動を充実させていく必要がある。
- 教員質問 40「高等部は、生徒の留学や海外に行ってみたいという意欲を高くしている」については肯定的評価が、昨年度の 92.2%から 94.2%に増加した。



	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 保護者質問 18「高等部は、生徒が留学や渡航したいという意欲を育てている」について全体では、肯定的評価が昨年度 65.5%から 64.5%と大きな変化は見られなかった。男女別では男子保護者は 61.6%から 63.4%と増加し、一方、女子保護者では 71.4%から 66.0%と大きな減少がみられた。質問 16、17 と同じく、男女の保護者の間の受け止め方に大きな差がみられ、女子保護者の肯定評価の低下の原因を探る必要がある。</li> <li>● S G H 終了後も学校側は継続して、教科を問わず国際教育を浸透させ充実させていく必要があり、生徒達や保護者対象に海外渡航や留学の目的や国際交流プログラムの参加の安全性や意義を伝える機会を増やす取組が必要である。</li> </ul>
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 5年間の S G H プログラムも今年度で最終年度を迎え、学校全体で国際理解教育に取り組む体制を強化する絶好の機会が終了しようとしている。S G H 校指定期間中に得た様々な知識・経験による財産を、学校としてどのように継承していくか、学校全体として新たな委員会を設置するなど審議していく場が必要と考える。また生徒間においては、先輩として後輩に何を残していくかを考えさせ、その機会を提供していくことが必要である。</li> <li>● S G H の一環として実施してきた国際交流関係のプログラムに代わるものとして学校が何を生徒達に提供できるのかを、教師全体で考えていく必要がある。</li> <li>● 国際理解教育をどの科目の教員も担当できるように、特に若手を中心とする多くの教員に海外研修・フィールドワークの引率など海外に出ていく機会を提供していき、最終的には一部の教員のみならず、全教員の意思疎通と理解のもとで国際理解教育が進められるものとなるようにする。</li> <li>● 2018 年度は新高 1 生は、全生徒がタブレットを所有することになり、学校から生徒達のみならず保護者とも情報の共有が容易になった。国際理解教育についての頻繁な情報発信が可能になったことにより、昨年度に引き続き、全教員・生徒に国際交流プログラムについてさらに理解を促し、参加まで導けるようにする。</li> <li>● 短期・中期・長期留学希望の生徒達の数をさらに増やしていく取組が今後も求められるが、生徒達の海外渡航意欲を高めるには、まず生徒達が学校生活を休学して留学しやすい教務的なサポート体制と、休学中の学習の遅れを取り戻すための補習体制の確立が必要となってくる。また生徒達の留学への興味・関心を高め、保護者の理解を促すためには、留学関係の説明会の開催数を増やしていくことが必須であり、また国際交流部や英語科の教員のみならず、全教員が留学制度や国際交流プログラムについての情報を共有し、理解を深めることが大切である。</li> <li>● 数十年間継続してきた短・中・長期留学生受け入れ制度により、学校として海外渡航機会のない生徒達にも校内で国際交流する機会を与えられている。2018 年度は、短期・長期を含む出身国が異なる 4 名の留学生を受け入れる機会があった。引き続き学校として積極的に留学生を受け入れる姿勢を維持していくためには、ホストファミリーの確保が不可欠であり、それが高等部の在校生であれば留学生と学校との絆がさらに深まることになる。今後も引き続きホストファミリー登録制度を充実させ、謝礼など待遇充実も考え、登録者を増やしていく工夫をしていく。またそれと同時に国内でも国際交流・協力ができるという感覚を保護者・生徒・教員の中に養っていく必要がある。</li> </ul>

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

## 総合評価

キリスト教主義教育への理解が生徒・保護者・教員ともに概ね共有できていると言える。ここが教育の根幹であるので、さらなる理解を深める努力が高等部として必要であると考え、男女での関わり方、意識の差は常にある。学外に向けてのボランティアを始めとする活動への参加や意識が高まってきていることは評価できる。

教育に関しては、学習の内容理解のために工夫がなされた魅力ある授業で、学習内容の定着を図ることを特に意識して教員は授業を行っており、生徒にも一定程度、そのような授業を受けていると感じている。本格的にICT環境が整ったなか、新入生は全員タブレットを持つこととなり、大きな教育環境が変化した。その影響はもう少し時間を経て検証する必要があるが、教員も研修を受ける機会を増やしたため、授業への意識も変革してきている。特にアクティブラーナーを育成する授業研究を深め、授業の深化を図っていく姿勢がよく見られるが、さらなる授業改善、生徒への学力の定着につなげていく必要がある。

生徒指導面においては特にタブレット端末を導入することに伴う、利用・使用時の研修を教員、生徒、また保護者にも実施しながら、高等部の校風にあったものを作り上げることに注力し、生徒と共に作り上げようとしている。まだまだ問題点は多々あるものの、一つずつ解決を図ろうと教員と生徒が一体となって考えていることに意義を感じる。

生徒指導全般においても、自治活動においても、生徒自身の自治意識を重んじながら、それらを考慮して適切な指導がされている。ただ、アンケートの結果にもあるようにルール、マナーの徹底にはまだまだ改善の余地があり、全校生1,100名を超える大規模校としての、これまでにない難しさもある。それらの問題への対応を引き続き考えていかねばならない。

教育環境整備においては男女共学化も整い、またICT環境も整ってきたので、これからはソフト面での環境整備に徐々に移行すべき時にきており、いかにその環境を生かすかに重点は移っていく。また、来年度にはメンター制度も導入され、その運用をまず軌道に乗せ、さらにより良き教育環境整備は何かの目標を設定することになる。

人権教育については、抜本的な改革が行われ2年目となり、昨年度からの改善もなされたが、まだ改革途上であり試行錯誤を経ながらさらなる改善に着手している。種々の人権問題に対して、人権教育推進委員会、カウンセリング委員会、生徒部、カウンセラー、管理職がチームとして機能してきており、情報を教員間でしっかりと共有し、きめ細かく丁寧な指導を心掛けている。ただ、人権学習が単なる知識の修得にとどまらず、日常生活に生きる人権学習となる工夫はまだまだ必要である。

最終年度となったSGH事業は、これまで構築した5年間通してのプログラムが順調に進んでいるが、生徒、教員の中で慣れも出てきて、関心がやや薄まってきていることがアンケート結果から見て取れる。今年度3年生でICT機器を用いて海外の学校とリアルタイムでつなぎ、協働で課題研究に取り組んだ新しいタイプの授業は今後の探求型授業に大きな示唆を与えた。

事業最終年度となりSGHでの成果をどのように、今後の高等部の国際理解教育にどのように継承していくかを2018年度末までに結論を出すことになっている。高等部として関西学院がめざすところのグローバルリーダーである「Mastery for Serviceを体現する世界市民」の育成にしっかりとつなげていく。

## 2018年度の評価をふまえて2019年度に予定している評価項目、テーマ等

2019年度は、評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」はもちろんのこと、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、SGHで得た成果などをどう継承され、高等部の教育に生かされているかの検証が必要となり、「国際理解教育」の評価項目に変更を加えて設定する予定である。さらにICT教育環境が整い、タブレットを教員・生徒が用いた授業を展開していくので、それらを継続して検証するための評価項目の設定を考えている。

### 第三者評価／学校関係者評価

キリスト教主義教育の実践に関して、高等部は熱心に活動されていることがアンケートからわかります。外から見てみると、特に外部中学校から入学してくる一般生に対して、その指導が難しいのではないかと想像しますが、自由出席である早朝祈祷会の出席率は高く、外部への奉仕活動も積極的にされていますので、それも良い評価に繋がっているのではないかと考えます。キリスト教主義教育は関西学院の教育の根幹なので、今後も教員全員で気持ちを合わせて大事にしていってほしいです。学習指導に関しては、普段の授業はもちろん、どちらかといえば学力の弱い生徒に対し、放課後の居残り課題への取り組みなどを丁寧にやっておられ、学習の理解度を深める努力がなされています。関西学院大学への進学指導と共に、おそらく他大学への進学希望者の人数が、今後ますます増えていくのではないかと考えられますが、十分な進路指導の配慮と志望先の情報の提供が、これからも求められます。

教育環境が整備されたことに高い評価が得られています。タブレットを取り入れたことにより、高校生でも、その使わせ方と指導に難しい面があるのではないかと想像します。ICT委員会などを通じてその対応にあたっていると伺っており、せっかく導入したものが、ますます授業理解と学力向上の成果につながっていくことを期待します。高校生として自分でしっかりと考え、物事を主体的に判断できる人間へと成長して欲しいです。

生徒の人数が兵庫県下でも非常に多い学校となり、生徒指導およびカウンセリングの面でも配慮が必要となっています。高等部生は礼儀正しく、自分たちの学校に誇りを持っていると思いますので、人権意識を高め、みんなの居場所がある風通しの良い学校づくりをこれからもめざしてほしいと願います。部活引退後に、福祉施設で介助の働きに長期間参加する生徒がいることは素晴らしいと感じました。

SGHプログラムに関しては、以前から高等部は定評があります。関西学院らしく、国際的な視野を身につけると同時に、すぐ近くにいる人の心の痛みをわかろうとする人間として、これからも一人一人が成長して欲しいと願います。

キリスト教主義教育の実践を根幹に据え、今年度最終年の5年目となるスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業で展開してこられた国際社会を視野に入れた取組によって益々教育の幅を広げられ、関西学院のモットーであるMastery for Serviceを体現する世界市民を育成する教育が一層発展していることが伺えます。

共学化への移行も安定し、iPad一斉導入というICT環境の大きな変化に対しても教員が一丸となった前向きな姿勢で取り組んでおられること、人権教育に真摯に取り組んでおられることなど、高等部が時代の変化に対応した取り組みに積極的でありつつ、丁寧な心の教育をしておられることも伺えます。特に「人権ウィーク」を設定しての「講義」だけではない深い対話のある取組、いじめに対する学校の厳粛な姿勢などは生徒・保護者の評価も高いです。

課題として挙げられるのは、チャペルなど集団行動時の静けさの確保や通学時のマナー、ICT面での使用規制などでしょうか。生徒増という環境の要因もあるかもしれませんが、これら生活面の改善に教員と生徒がチームとして取り組んでおられることで良い効果が期待できると考えます。

教育環境も一層の整備が進みICT活用も広がっているこの流れで、SGHで開発された国際的な視野を取り入れた教育を、SGH後も維持・継続・発展されることを期待します。

共学化が完成2年目を迎え、生徒へのキリスト教主義教育が安定して展開されています。今後も、キリスト教主義教育についての評価や実践の男女差を考慮し、人権教育と関連させながら実施していくことが必要と思われます。教育課程・学習指導については、関西学院大学への推薦制度に応じた教育課程を編成する中で、英語・数学を中心として全生徒の基礎学力の定着と学力向上のための取組がなされていることが評価できます。学習指導要領の改訂、大学入試改革が進む中で変化する関西学院大学、さらに社会が求める学力、特に英語4技能の習得・向上に対応した取組の充実が望まれます。

また、進級・進学などに関する情報提供の状況についての肯定的評価が生徒と保護者ともに高い割合を示していることが評価できます。今後も進路選択の多様化に備えた保護者への適切な説明と対応の一層の充実が期待されます。生徒指導に関しては、制服の着方などの学校生活のルールを遵守するための生徒主体の取組の導入や、自転車通学などにおける安全面に関するきめ細やかな指導の展開が評価できます。一方、「守るべきルールやマナー」への否定的意見が、依然として生徒および教員とも一定数生まれています。タブレットの全面導入を背景に、いじめ問題も含めた人権教育を推進するとともに、生徒への丁寧な説明と指導の実施、さらに保護者との協力、教員間の共通理解を図ることが望まれます。

教育環境整備については、1年生全員に導入されたタブレットを活用する環境が整えられていること、その環境の下で授業・研修などの充実が図られていることが評価できます。この環境をもとに、全校生徒1人1台のタブレット端末の使用を踏まえたアクティブラーニング型授業・PBL(Project Based Learning)型授業の展開と高等部独自のアクティブラーナーの育成が期待されます。

国際理解教育に関しては、最終年度となったSGHの教育プログラムにおいて、大学教員による講義、協働学習などの教育実践や各種の国際交流プログラムが学校生活の様々な場で展開され、海外生活や留学への関心の維持につながっていることが優れています。多様な国際教育プログラムを提供する関西学院大学との連携を深め、SGH終了後の次年度においても国際理解教育を推進する体制が維持できるようプログラムをさらに充実させていくことが望まれます。

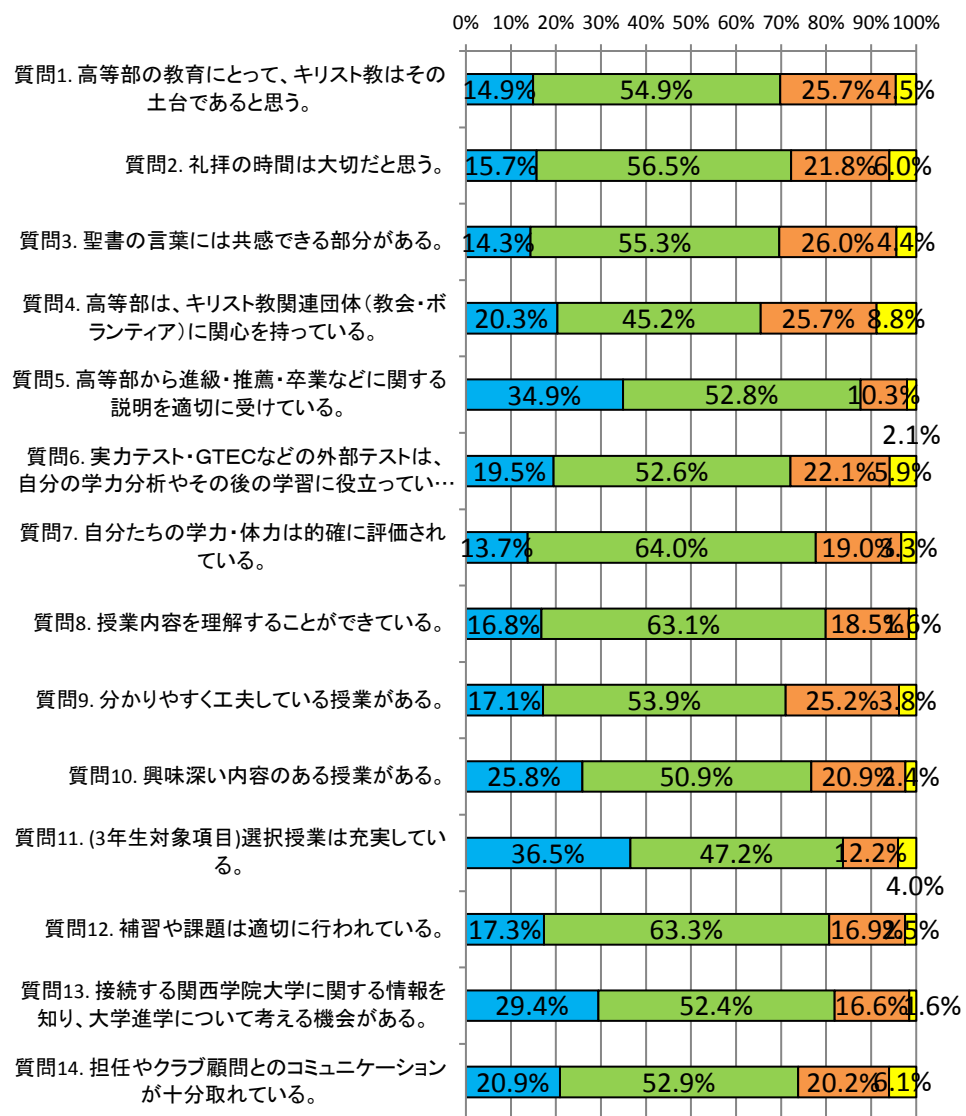
2018年度の高等部の教育活動全体が、総合学園としての関西学院の一貫教育における中核として先進的な教育が展開されていることが高く評価できます。そして、ともに中等教育を担う関西学院中学部および千里国際中等部・高等部、さらに関西学院初等部との連携・情報交換を一層強化することで、より大きな推進力となっていくことが期待されます。

生徒指導面においてタブレット端末の導入に伴い、利用・使用時の研修を教員・生徒・保護者に実施していることが興味深いです。教育環境整備において男女共学化とICT環境が整い、これからはソフト面での環境整備に移行するとのことです。この点について今後とも注意深く進めてほしいです。また来年度からメンター制度も導入されるので、教育環境整備を一段と進めることが求められます。最終年度であるSGHで得た成果検証において「国際理解教育」の評価項目の整備と運用が引き続き着実に進むことを期待します。

2018年度学校評価

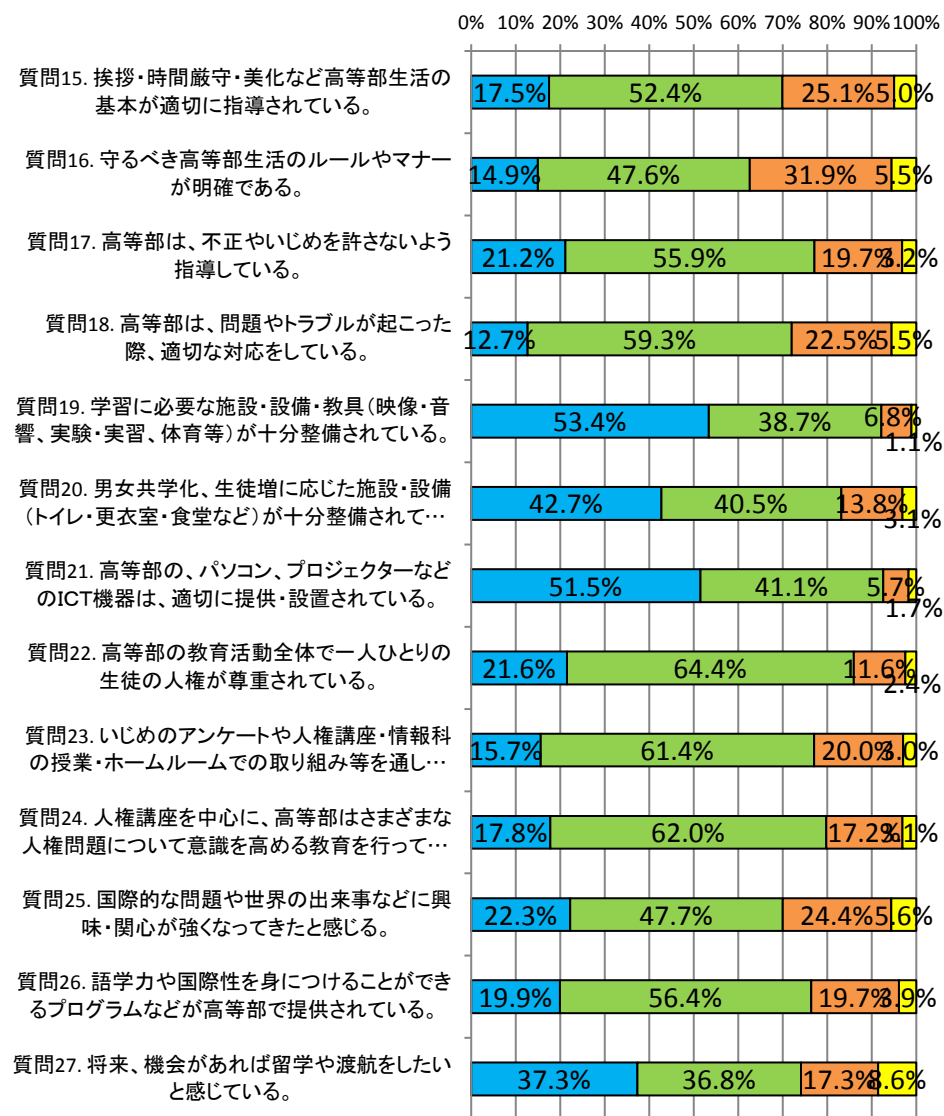
2018年度 全校生生徒学校評価アンケート

2018年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・生徒 質問1～14 (回収率 98.2% 1109人/1129人中)



■ 回答番号1: 強く思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

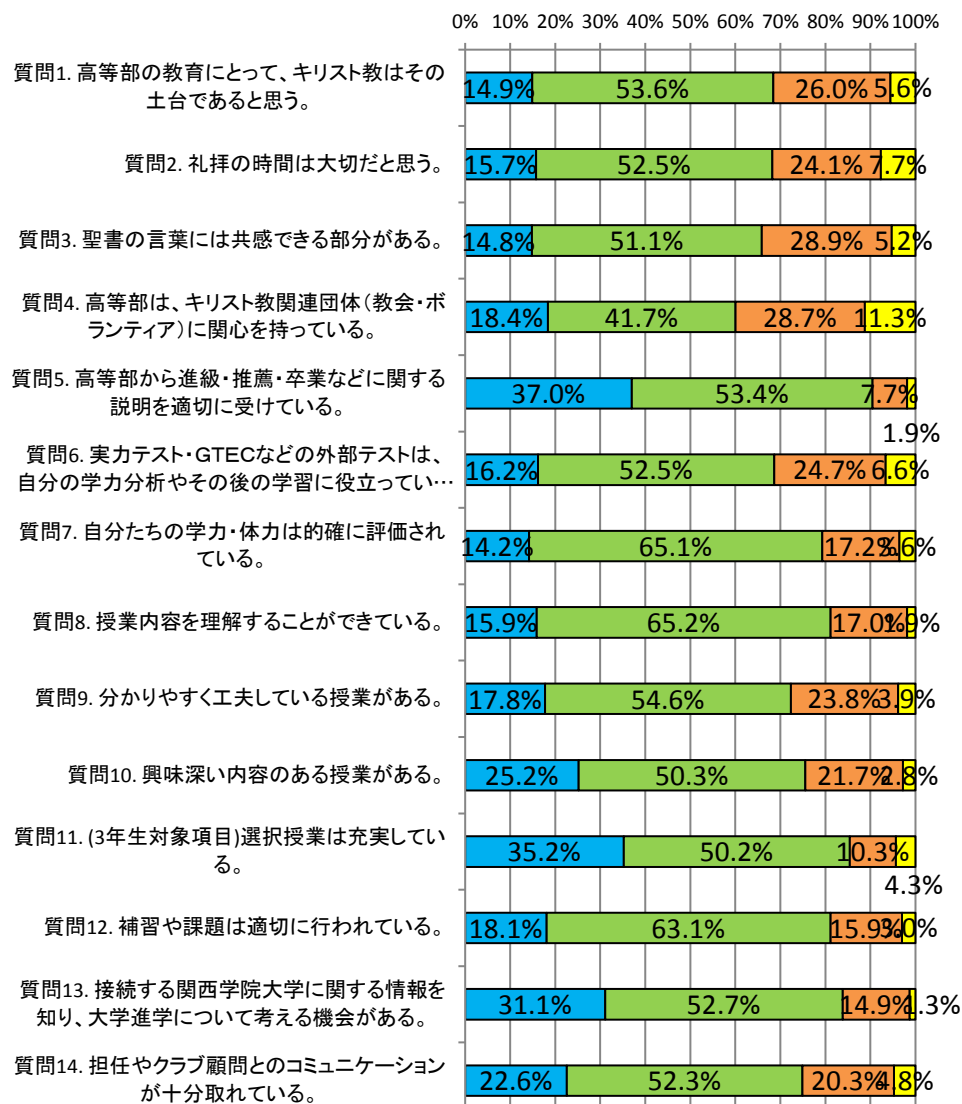
2018年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・生徒 質問15～27 (回収率 98.2% 1109人/1129人中)



■ 回答番号1: 強く思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

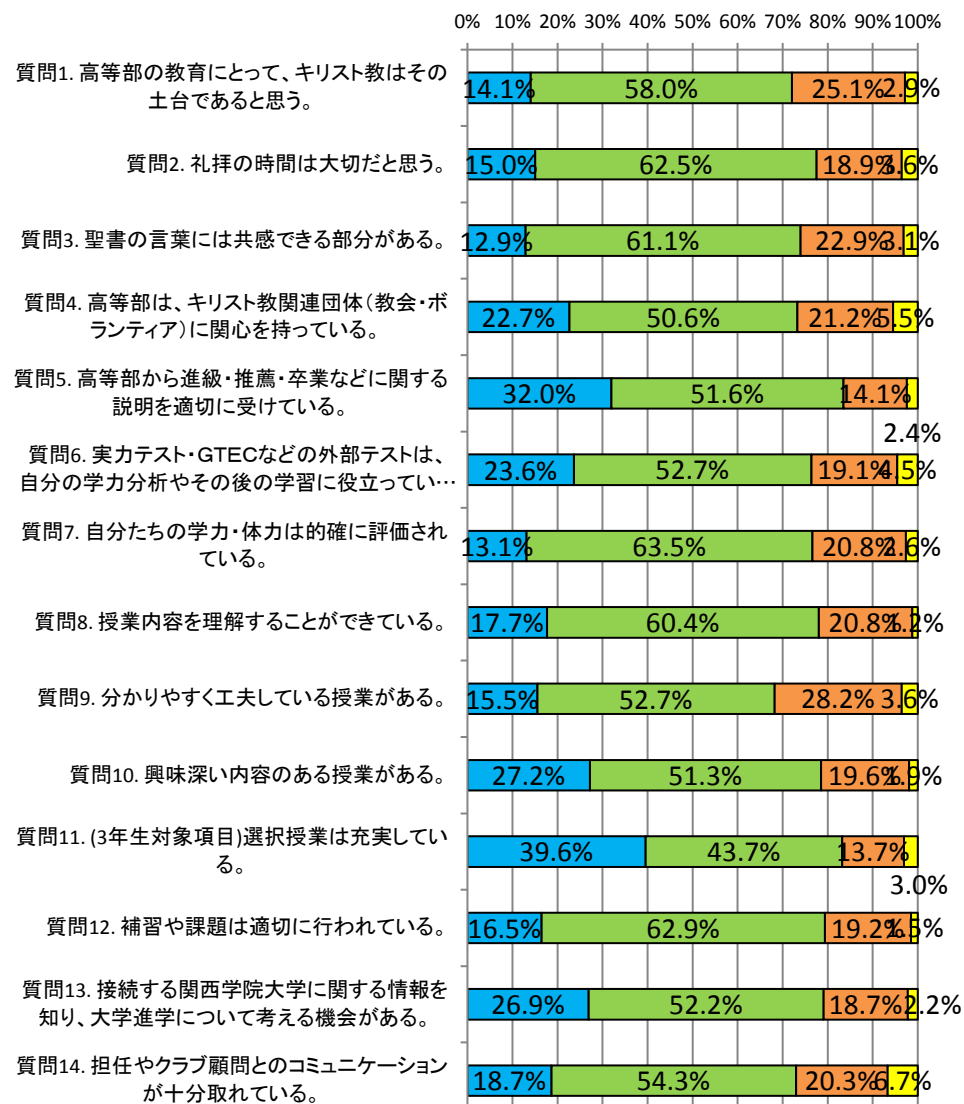
## 2018年度 男女別生徒学校評価アンケート

### 2018年度 学校評価アンケート集計結果 高等部・男子生徒 質問1～14 (648名)



■ 回答番号1: 強くそう思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

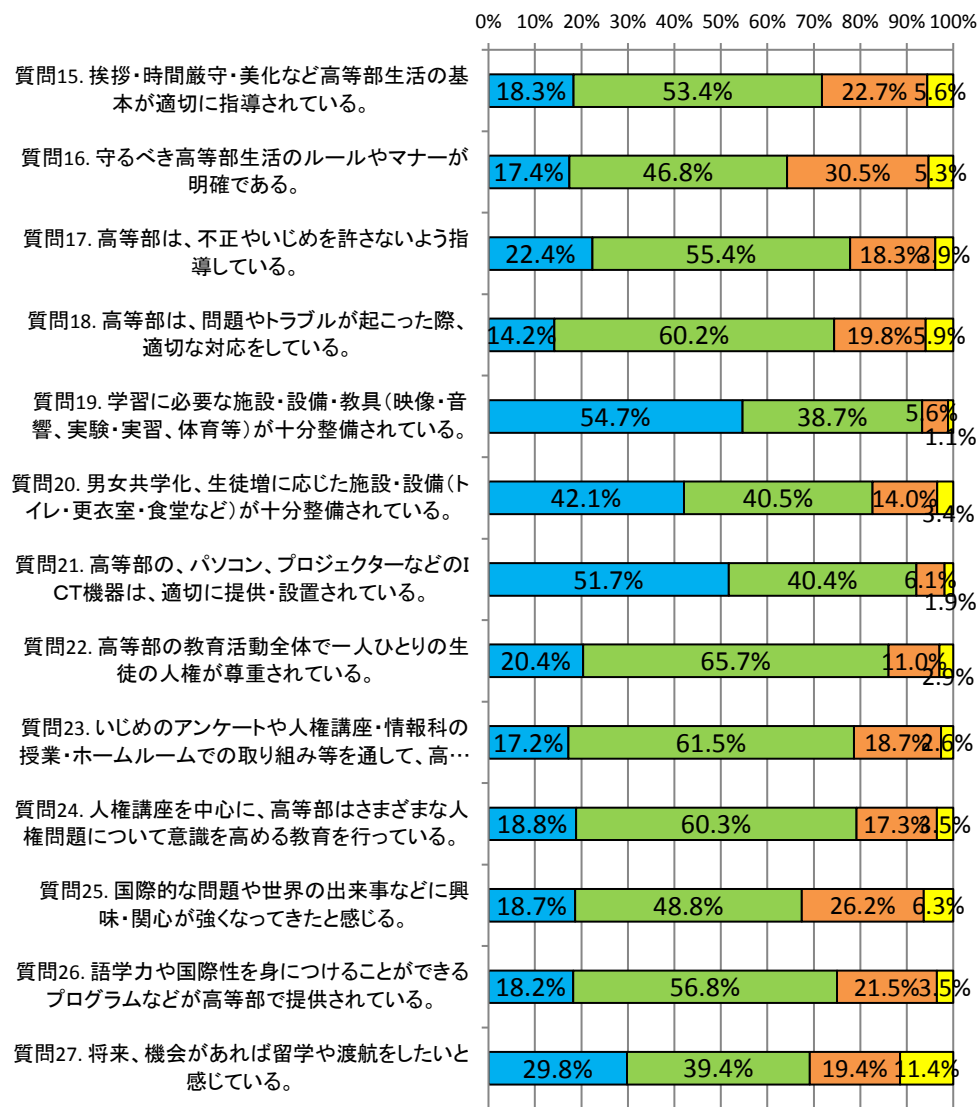
### 2018年度 学校評価アンケート集計結果 高等部・女子生徒 質問1～14 (320名)



■ 回答番号1: 強くそう思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

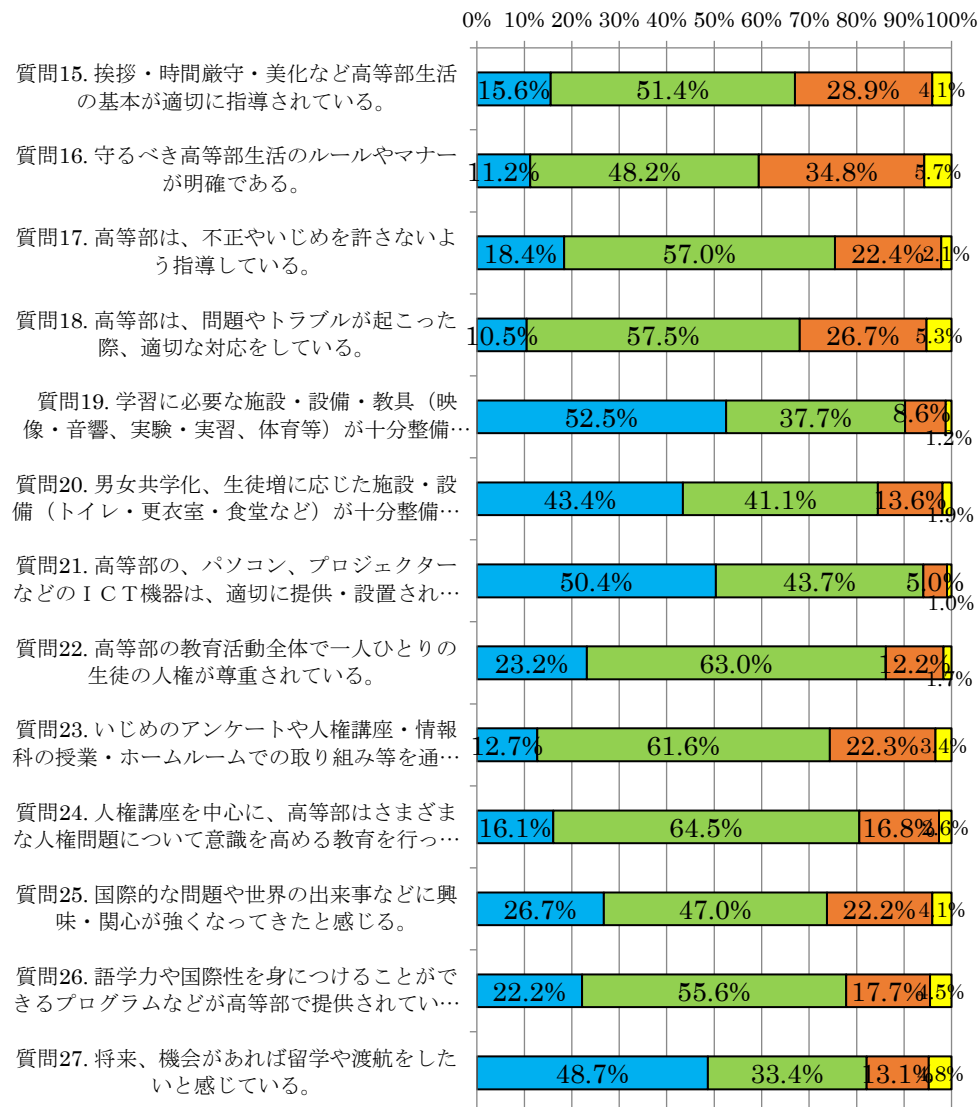
## 2018年度 男女別生徒学校評価アンケート

### 2018年度 学校評価アンケート集計結果 高等部・男子生徒 質問15～27 (648名)



■ 回答番号1: 強く思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

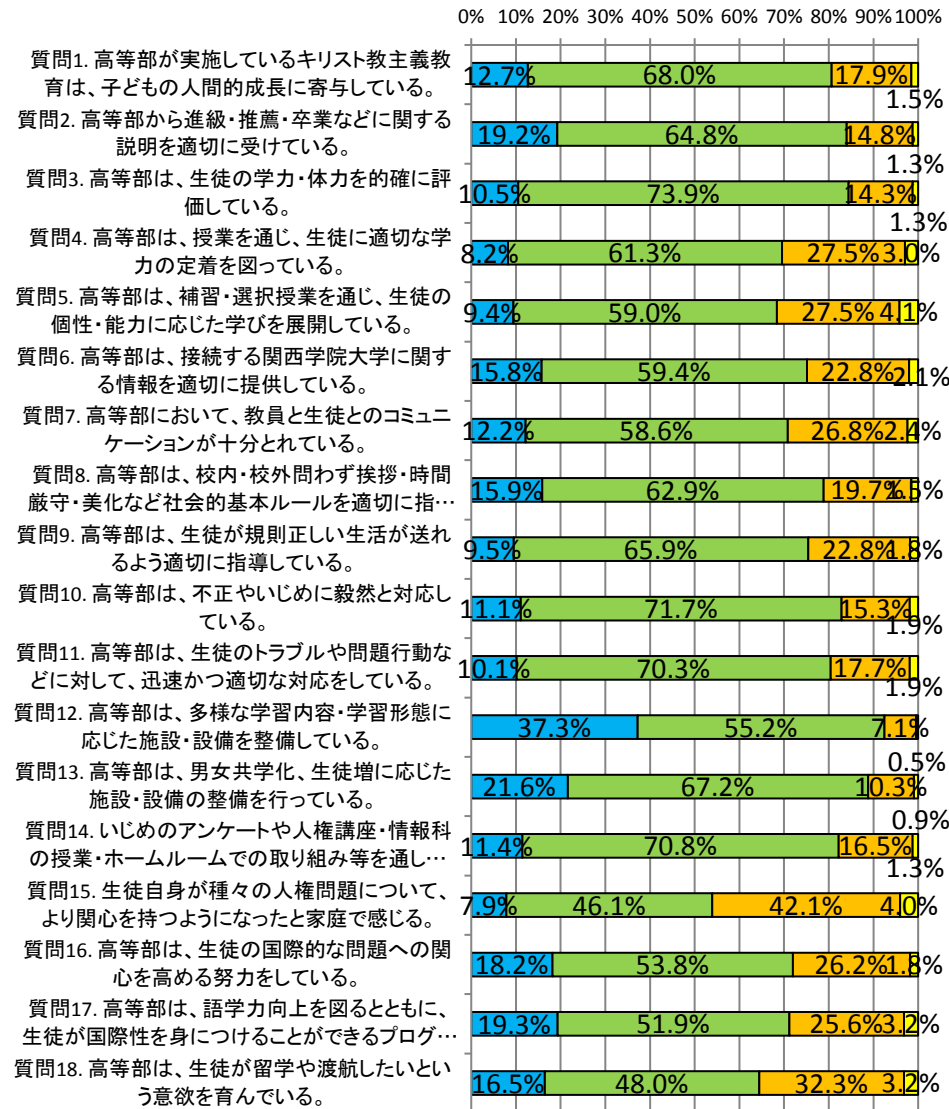
### 2018年度 学校評価アンケート集計結果 高等部・女子生徒 質問15～27 (320名)



■ 回答番号1: 強く思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2018年度 保護者学校評価アンケート

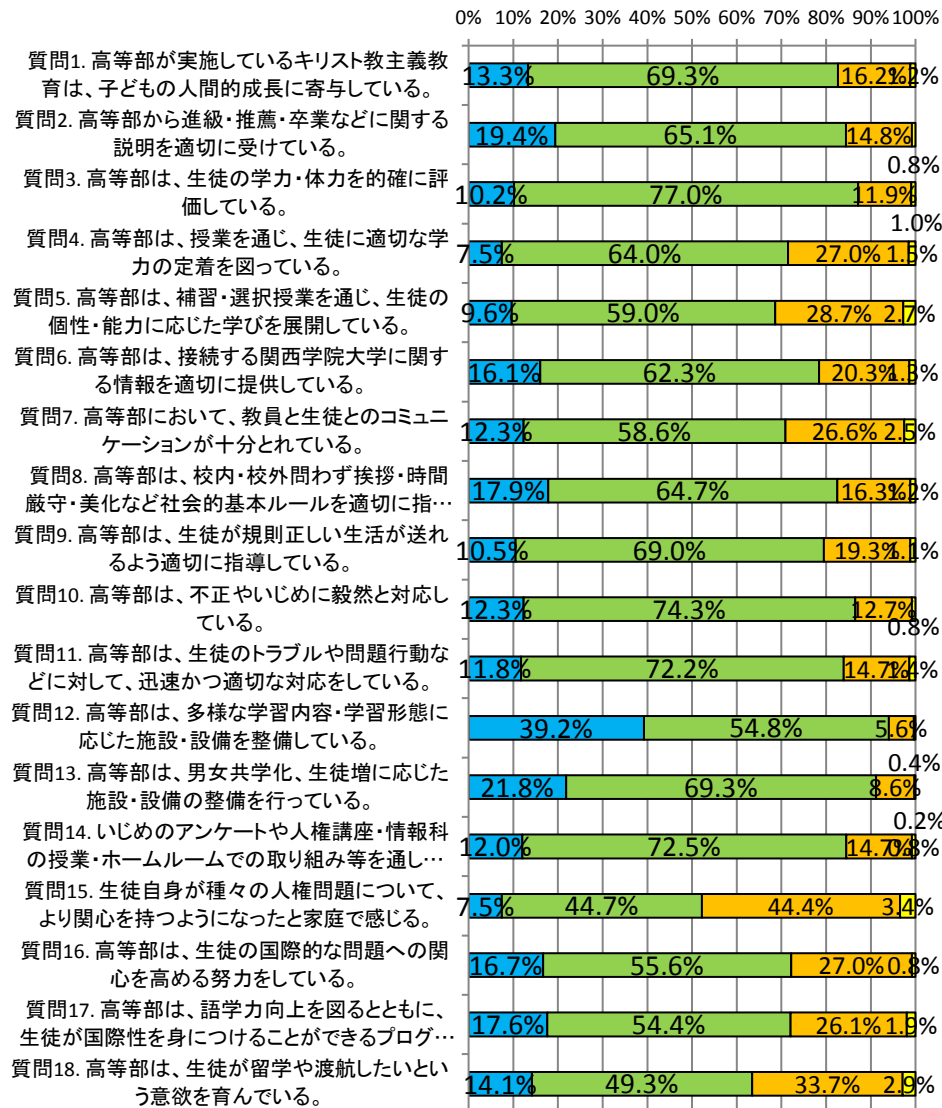
2018年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・保護者（回収率 77.3% 877人/1134人中）



■ 回答番号1: 強く思う      ■ 回答番号2: どちらかといえば思う  
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったく思わない

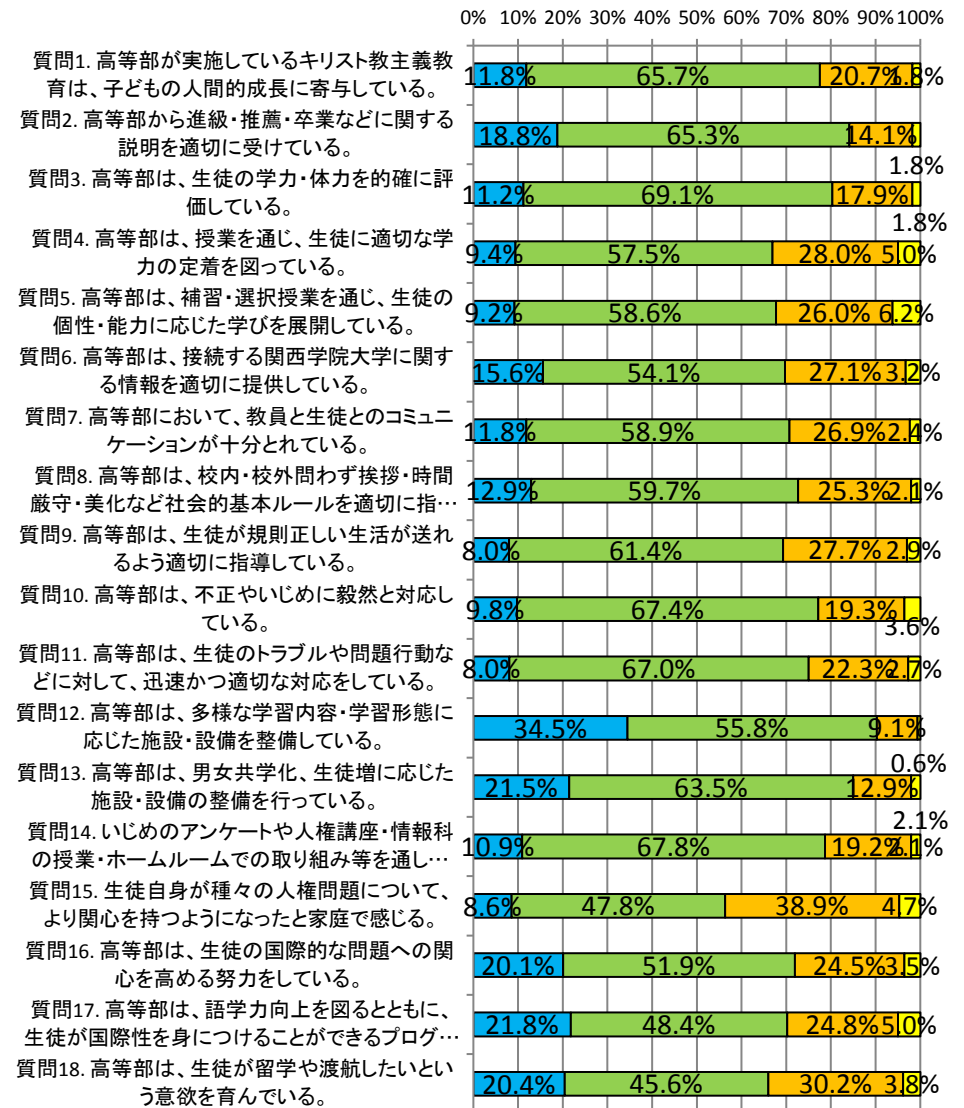


2018年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・男子保護者（524名）



■ 回答番号1: 強くそう思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

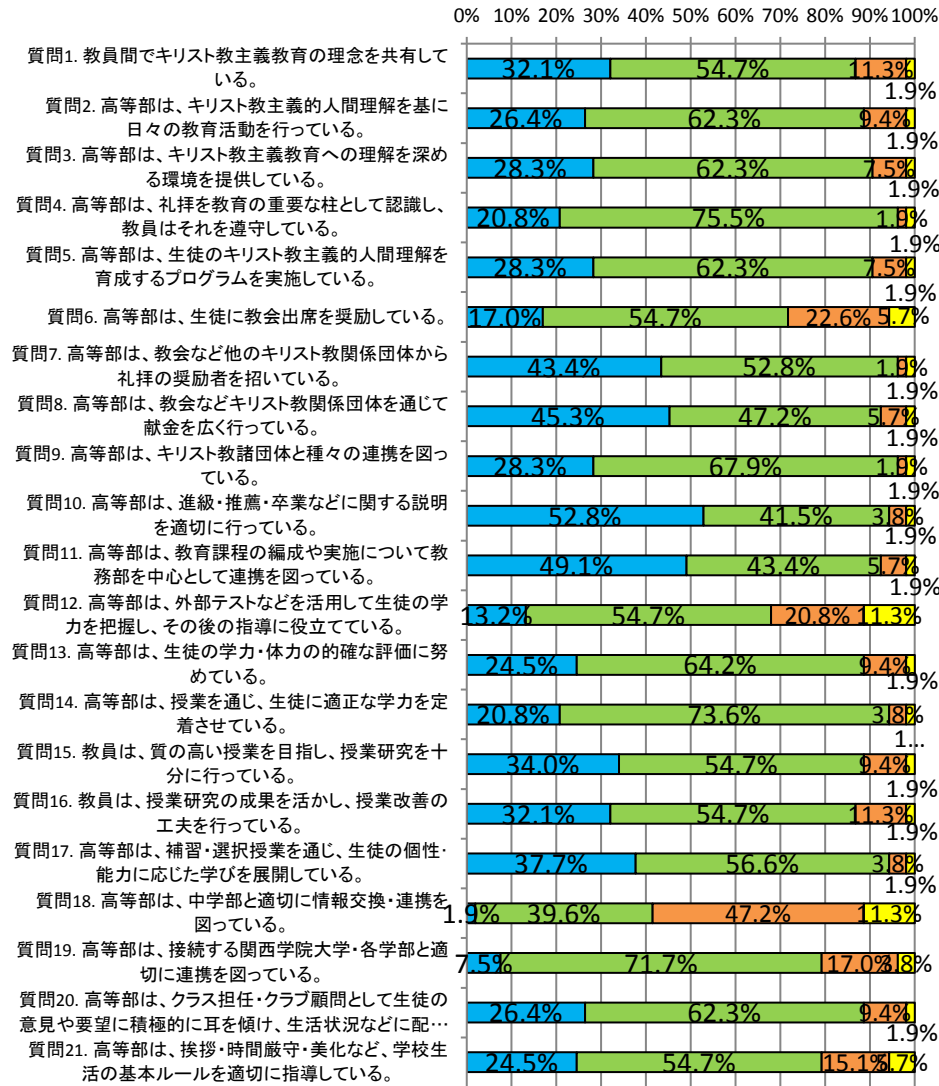
2018年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・女子保護者（340名）



■ 回答番号1: 強くそう思う      ■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う  
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない      ■ 回答番号4: まったくそう思わない

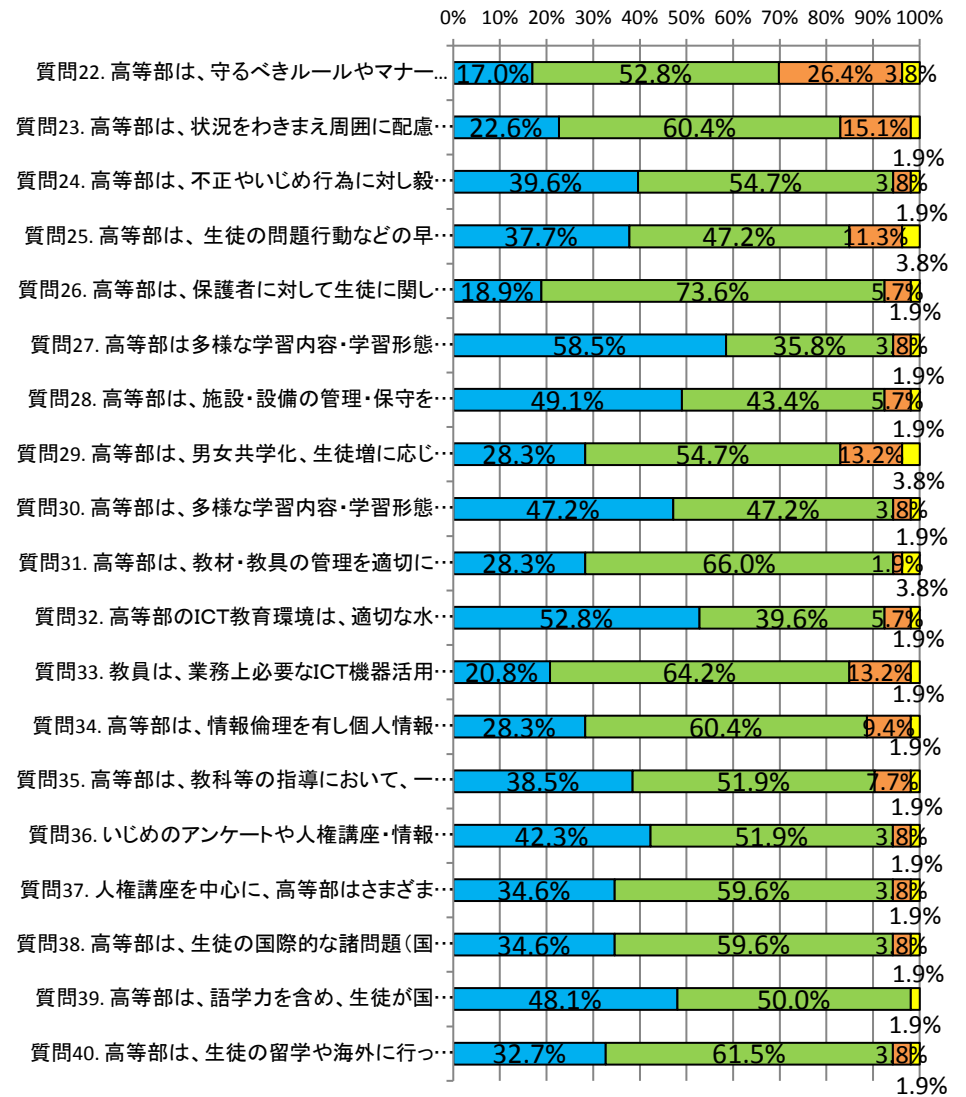
2018年度 教員学校評価アンケート

2018年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・教員 質問1～21 (回収率 100% 53人/53人中)



■ 回答番号1: 強く思う  
 ■ 回答番号2: どちらかといえば思う  
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない

2018年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・教員 質問22～40 (回収率 100% 53人/53人中)



■ 回答番号1: 強く思う  
 ■ 回答番号2: どちらかといえば思う  
 ■ 回答番号3: あまりそう思わない  
 ■ 回答番号4: まったくそう思わない